Title	巻頭言　新しい日本社会の再建 ： 二度目の敗戦体験としての大震災を正面から受け止めて
Author(s)	阿久戸, 光晴
Citation	聖学院大学総合研究所紀要, No.51, 2012.1 : 3-5
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=4202
Rights	

聖学院学術情報発信システム ： SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

巻頭言　新しい日本社会の再建

――二度目の敗戦体験としての大震災を正面から受け止めて――

聖学院大学総合研究所副所長
聖学院大学学長　阿久戸　光晴

「過去を記憶しないものは、これをふたたび経験するように運命づけられている。」（ジョージ・サンタヤナ）

「日本には再建という大きな希望が残されている。そして全世界の人々が私たちに注目している。」（加賀乙彦）

どうしても必要に迫られて東日本大震災直後の被災写真をインターネット上で取り込んだところ、よく見たらそれは一九四五年八月の広島・長崎の原爆投下直後の写真であったり、同年の三月一〇日の東京大空襲後の写真であったりすることがあった。それらは水害の有無を除いて酷似している写真であるが、これは大変暗示的なことである。なぜなら、それは今回の大震災が日本国家にとって、二度目の敗戦であることを示唆しているからではないだろうか。しかしいったい日本国家の何が敗れた

のであろうか。

昨年三月一一日の二カ月前、全国のある大学責任者の会で、私学の教育責任という趣旨で、政財界の代表者の方々の発題があった。その趣旨は次のとおりである。日本は強き国を目指し、そのために限られた財源の集中的教育投資によって、世界に冠たる地位を占めるべしとの内容であった。端的に「『強い』若者を集中して育てよ。LD（ラーニング・ディスアビリティ、学習障がい）青年など『弱い』若者を退けよ」ということであった。これは日本が歴史的に繰り返してきた「強者の国、日本。アジアと世界に冠たる日本」の「復旧」論なのである。ちなみに、「復旧」は、二〇〇一年九月一一日後にも現れかけた考えであり（グラウンド・ゼロ地に世界貿易センターと同形のものを復旧しようというブッシュ政権の試み。アメリカ市民の反対で断念）、一九四五年八月一五日以降にも度々現れた動きであり（敗戦がもともとなかったように明治維新以来の日本の形へ元に戻すという動き）、古くはイエス・キリストの十字架の死が単なる一時的意識不明であるとして「復活」を理解しようとした一部の教派の考えなど、すべてに通じるものであろう。

しかしこの日本的伝統への「復旧」は、現代社会における人間論および教育論の根本に触れる問題であり聞き捨てにできない発言と判断し、私は真剣な問いかけをした。その結果は事実上並行線であったが、その二カ月後にあの大震災は起きた。

今回の大震災は、五〇号の巻頭言で述べたとおり、けっして「天罰」ではないが、日本が繰り返し歴史的にたどってきた道の第二の挫折をもたらしたものと受け止めるべきである。そうであってこそ、命をささげられた一万数千人の方々の心を受け止めることになると信ずる。今私たちにとって被災からの復興が急務であるが、それは建物の復興にとどまるものであってはならないであろう。それ

は新しい精神の復興、その上に立った新しい国づくり、社会形成の建設でなくてはならない。そして多くの傷（とくに心の傷）を負った方々の立ち直りの支援と並行するものでなくてはならない。ここに大学が日本社会に貢献してゆける使命共同体としての役割がある。

これらの再建をとおして、私たちは次のことの大切さを学んでいくであろう。これからの日本社会は、「強者」（それが本当の強者か否かはともかく）のみが中心的役割を果たし、国際競争に勝利するために「落伍」者を顧みようとしない国家や社会のあり方ではなく、国家・社会の構成員がグローバルな規模で互いに苦難を分かち合い、助け合うことにおいて発揮される「成熟」した精神と諸政策を基礎とする歩みこそ、礎とすべきことを。